



土地

パクキョリ

朴景利

6

鎌田光登 訳

福武書店

土地

バクキョウリ

朴景利 ⑥

鎌田光登 訳

福武書店

土地

⑥

一九八六年三月五日 第一刷印刷
一九八六年三月一〇日 第一刷発行
定價 一〇〇円

著者 朴景利

訳者 鎌田光登

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町六一六 千一〇二
電話(〇三)三〇一三三二
振替口座(東京)六一〇五〇九七

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© PARK KYUNG RI 1983

シリーズ・コード ISBN4-8288-2041-8

土地 911-X ISBN4-8288-2082-5 C0093

落・乱丁本はお取替え致します

土地 6 — 目次

第三篇 終末と発芽〈承前〉

16章	李府使宅の若様	8
17章	姫の他出	29
18章	襲われた七星の女房	46
19章	欲情の生けにえ	65
20章	金書房の女房	85
21章	底知れぬ沼	105
22章	帰ってきた趙俊九	120

23章	金書房の発病	143
24章	死と鞭と	162
25章	江清宅の葬式	178
26章	任の母親の出産	194
27章	月仙との出会い	211
28章	李東鎮の旅	230
29章	崔致修の死を知る	247

装丁 菊地信義
カバー絵提供 韓国文化院

土地
6

第三篇 終末と発芽（承前）

16章 李府使宅の若様

李東鎮^{イドンジン}が在所から旅立って行つたのは崔致修^{チオニエス}の生前のことである。その留守宅では、七十を越えた老母と幼い二人の息子たち、それに妻が留守を預かつていた。親類縁者が多いうえ、ようやく十歳を過ぎたばかりの李東鎮の長男も、廉進士^{ユンジンサ}（進士は科擧の小科初試への合格者に対する総称）宅の娘との縁組みが決まっております、おまけに李東鎮の妻の実家の暮らしが富裕であつたから、家長不在のこれら留守家族が餓死するのを見て見ぬふりをするとは思えなかつた。けれども、留守宅の暮らし向きが裕福だとはいきれなかつた。李東鎮の祖父と父親は、ともに顯官とはいえぬまでも、長く官途につく幸運に恵まれ、父子二代にわたつて官職につくことができたが、席の温まる間もなしにそちこちのいなかを転々とせねばならなかつたから、清吏^{セイリ}の尻の穴は錐の先のように細いといわれるように、その生活は貧しく、したがつて彼らは、子孫のために美田を買うことはなかつたのである。クソまじめで身のほどを弁^わえて生涯を送つた彼らに比べると、李東鎮は豪放な気性の持ち主であつた。文庵先生に深く心酔する余り、ついに先生の思想が猛毒と冷笑と化し、底知れない奈落にでも落ちこんで行くような倦怠のうちにあつて、生きることの価値を否定した崔致修、自らをどん底へ突き落とすようにして世を去つた崔致修とは対照的に、根本とやらに取り組むことに早くから虚しさを覚え、また自分はそうした道に進む適材ではないと悟つた

李東鎮は、ある程度の深さまで進んだところで学問から足を洗ってしまったわけで、彼の批判精神には多分に文医員のそれに通じるものがあった。常民層に無限の愛情と希望を寄せている、中人階級（朝鮮王朝時代の両班階級の次に位置する階級。もっぱらソウルに住み計理、氣象観測、詔官、医官など技術的で下級の職務に従事した）出身の文医員のそれと同質とはいえないまでも、李東鎮は常民層に同情を抱き、彼らを理解しようとしてきたし、東学の乱に対する見方にしても、崔致修のそれとは見る角度が異なっていた。彼は常民を決して烏合の衆だなどとは考えなかった。そのうえ、指導者と民衆が結束して燃焼させた情熱を高く評価する一方で、国権ならぬ王権延長のために外国の勢力を引きこんだ為政者どもの愚拙な行為に対し、痛烈な批難を浴びせてきた。このような李東鎮であったから、自分が官途につくことなど度外視するよりなかつたろうし、つねに傍觀者の立場に立っていて、家事にも無頓着であつたから、とりたてて家運が開けることもなかつた。しかも、そんなありさまで飄然と旅立ってしまったのである。李東鎮の妻廉氏は鷹揚というより、話しぶりといひ行動といひ元來がのんびりした、物事にこだわらない性格の女性であつた。おまけに上の息子との縁組みが決まっている先方は富裕で、下の息子も後継ぎのない父親の従兄弟のところへ養子にやることになっており、五百石以上の稲を取り入れるほどの余裕のある暮らし向きであつたから、廉氏が息子たちの将来を思い煩う必要はなかつた。家を出てすでに久しい夫の李東鎮についても、いづれは帰宅するものと思つていたし、奴婢たちは免賤（賤しい奴婢の身分から解放され常民になること）されて屋敷から立ち去り——政府が公私の奴婢制度を撤

廃した際、李東鎮は奴婢の奉公文書を焼き捨てて彼らを解放した——、廉氏が嫁いで来る折、実家から連れてきた藪睨みの小間使いと、これと妻せた億鉄の二人を使って暮らしを営んでいこうとしていた。

わが子崔致修の莫逆の友であった李東鎮の家庭のそうした内情を、崔参判宅の尹氏夫人はつぶさに知っていた。いや知っていたにとどまらず、過ぐる正月の喪明けに、年始の挨拶を兼ね母である廉氏にともなわれて訪ねてきた李東鎮の長男相鉉が気に入ったと見え、尹氏夫人は筆と墨を購うようと数枚の銀貨をその手にしっかりと握らせたことがあった。近ごろ目に見えて人柄が変わった尹氏夫人は、奴婢たちの面前においてさえ感情をあらわにすることがひんぱんであったが、それにしても相鉉に対して示された親愛の情は破格のものといわねばならなかった。尹氏夫人は年に一、二度は李府使（府使は郡衙の長）宅——李東鎮の祖父の職位——へ穀物を届けさせてきた。いま芑が牽いていく牛車も、数日後に祭祀（法事）が営まれるはずの李府使宅へと向かうところであった。白米二石に糯米一俵、おのおの二斗ずつの小豆と緑豆、取り立ての蜜が一升、卵の入った藁包みが十に三疋の反物を積んだ牛車の尻には、吉祥が腰を掛けて揺られていた。雑貨売りの老婆を待ちきれなくなった鳳順の家では吉祥に邑内（邑は人口五万以下の地方都市で、地方行政区域の一つ。邑内は町役場の所在地）への使いを頼んだが、丁度、芑が邑内へでかけると知って吉祥は渡し舟を待たずに牛車に便乗したのである。頼まれた使いというのは唐糸（中国産の絹糸）を買い求めて帰ることであった。

鷲谷寺ユウダクにいたころ金魚僧キンギウソウ（仏画師）から絵筆の手ほどきを受けた吉祥は、いつぞや仮面をこしらえて鳳順の母親を驚嘆させたことがあるが、退屈すると木片を削ったり土くれをこねたりして、女の人形をつくるのが唯一の愉しみであった。そして、そんな具合にして出来上がった女の人形に、こんどは衣装をつくって着せてやるのが鳳順の得意とするところであった。また、衣装ばかりではなく、布団や枕、なつめの実一つ入るとも思えない小さな信玄袋や、花模様ハナノリの小さな足袋タビなどを作るため、鳳順の裁縫箱には、母親のそれからくすねてきた色物の端切れや緋緞ヒビロ（絹織物）でこしらえたさまざまの花、それは女の人形をつくるにはあり余るほどたくさん集められ、すぐにも厄払いの儀式を演じることができるところであった。

「どういふ娘だろうねえ、巫女ムスメの家でもあるまいに、縁起でもない」

鳳順の母親は気がねなく娘の頭をどついたりした。彼女が気がねすることなくそれができたのは、西姫セキは女の人形などにさっぱり関心を示さなかっただけか、針や糸を手にとってままごとのような衣装をつくろうとして見せることすらなかったからである。

「梅檀ウメタンは双葉より芳しというけど、足袋の継ぎを当ててみるとか、チョゴリの袖をつけてみるとか、お嫁入りの準備のことなど一つも考えようとしなくて、明けても暮れてもこんなばかな真似をするのは、いったいどういう料簡だい、鬼払いでもやるつもりかい」

娘の裁縫箱を引っくり返して、鳳順の母親はどなりつけたこともあった。ところが思いもよらなかつたことに、西姫が縫い取りをしてみたいといひだしたのである。おまけに、西姫と張り合

うように鳳順までが、それをしてみたいといひだしたのであった。

「じきに雑貨売りのお婆ちゃんが来るでしょうからね。そうしたら、唐糸なども仕入れて……陽気も暑くなつたことだし」

鳳順の母親は満足の余り眼をうるませて微笑んだ。腕のよい板前が珍貴な魚を手に入れて庖丁の刃を確かめる、といったときの気分とでもいおうか、それとも天下の壮士が職を棒に振つた競争相手にでくわし、おもむろに自分の腕を撫してみるそんなときの気分というべきか。とにかく今後は、自分の技術のありつたけを、読み書きを教える金訓長(訓長は漢文私塾の教師)以上に、いわゆる「お嫁に行く準備」を仕込んでやろうと思ふ半面、いつの間にかこんなに大きくなつてという思いから、鳳順の母親はうれしくなつてくるのであった。ところがどうしたことか、ちよくちよく出入りしていた雑貨売りの老婆はいつこうに顔を見せなかった。いつべんいひだしたら足許に火がついたようにせきたてるのが西姫の気性だったから、鳳順の母親はとりあえず自分のたんすの隅に白い半紙でくるくると巻いて仕舞いこんであつた唐糸を取りだした。汚れているうえ毛ぼだつてよれよれになつている紙包みを広げてみたものの、全く使われたことのない唐糸の色数が揃うはずはなかった。鳳順の母親は橙色(ガゼン)の法緞(緞子の一種)を手ごろな幅に切つて信玄袋用の図柄を描き、四方に木綿地をめぐらして刺繍台にはさんだ。

「とりあえずこの桃色の糸で、ここに梅の花と葉をこしらえてみてご覧なさいませ。じきに雑貨売りも参りましょうからね」

幾日か経ったが雑貨売りの老婆は現われなかった。齡の幼い割にはなかなかの出来映えだとほかの者たちにひけらかす言葉まで用意していた鳳順の母親は、その一方ですっかり失望してしまつた。西姫の手並みはそれはひどいものであつた。とにかくめちやくちやであつた。糸がでこぼこに縫われているのはまだしもで、なめらかな法綴までがしわくちやになり、縫い取りをしたのやら針で穴を明けたのやら區別がつかないありさまであつた。西姫に比べて鳳順のほうは筋がよかつた。西姫より二歳年長で、おまけに針が指に馴染んでゐることもあつたらうが、やはりもつて生まれた天分というべきか、細やかに縫いこまれていった糸の目はきちんと揃つていたうえ、厚ぼつたい梅の花と葉も全く生きてゐるように見えた。鳳順の母親も内心では満足した。けれど、おとなしい性格に比してねばり強さに欠ける鳳順は、じきに飽きがきてそれを投げだし、またしても女の人形に心を奪われた。西姫も飽きがき、荷が勝ちすぎることもあつたらうに、とにかく汗みずくになりながらねばり強く梅の花を、ついで葉を仕上げてから、蝶を縫い取る黄色の糸がないといつて癩癩を起こすのであつた。そんなことがあつたものだから、吉祥もこうして邑内へとでかけることになつたのである。その邑内へ^どでもでかけると分かつていたら、鳳順の母親も吉祥に使いを頼んだりはしなかつたかもしれぬ。だが、吉祥は彼女にそのことを知らせず屋敷を後にしたのであつた。

牛車の尻に揺られていた吉祥はいつしか物思ひに耽るようになり、牛車に乗っていることも、これから邑内まで使いに行くこともほとんど忘れていた。ゆつたりとうねりを上げて押し寄せる

波が水際の防波堤を叩いては退いていくように、引き続いて押し寄せてくる空想は吉祥にとってまたとなく甘美に感じられた。尽きることなく尾を引いて現われるさまざまな思いは、さながら万華鏡のごとくきらびやかで多様であった。とりどりに彩られているかと思えばまたとりどりの音に包まれ、過去から未来に至る追憶と夢が思いのままに、初めもなければ終わりもなしに彼の思念の広々とした空間を飛翔するのである。追憶の窓からはとある路辺で耳にしたうら寂しい風の音が聞こえてき、盲人が吹いていた笛の音が聞こえてき、梵唄ぼんはい（声明しやうめい）の声、明け方の山寺に響き渡った荘重な梵鐘の音が鳴り響いてき、棹を差しながら川を渡って来る通い船の船頭の船唄が聞こえてきた。また、追憶の窓からは絹物の頭巾に隠された月仙ウオケツニおばさんの顔も見えた。水色の紬のチヨゴリに白いカナキンのチマを風になびかせながら立っていた姿もかすめて行く。月仙おばさんの姿は、いつしか別堂の若奥様の後ろ姿に変わり、山を眺めていたあの九泉クウセンの物寂しい横顔が現われた。市場の通りをよろよろと千鳥足で歩く呑んだくれの姿もあった。そして、テラ銭を寄越さないとぶつぶついいながらその後を追う賭場の三下奴の姿も見えた。

「ほれ、もつてけ、野郎ども、銭の雷に打たれるんやったら、おつ死のうと構わんのやろ」

数枚の葉銭ヨフゾシ（真鍮・銅などで製造された平円形で中央に方孔のある一文通貨）を投げつけ、高笑いしながら立ち去る呑んだくれの赤い鼻も通り過ぎた。ばちばちと燃え盛るかがり火。闇を、夜を呑みこむように燃え盛る橙色の炎はしかしそれ自身が闇に包まれて、あたりにひと際濃い橙色の光を投げかけていた。その光を受けて、またときには背負って舞いつづけた旅芸人たち。赤々と燃え